

今年の紅葉はいまいち良くない。潤沢ヒュッテ社長の山口氏は、今年の紅葉についてミニコミ誌に、「静かなひかえめの紅葉」と伝え、もと信毎カメラマンの丸山氏は、「赤色に代わり黄色が主役の珍しい『紅葉の舞』ひそやかに」と表現した。ネガティブな言葉を極力抑え、訪れる登山者や読者をがっかりさせないための名表現ではあるが、実際、9月は長雨続きで、平年に比べ日照時間が半分、降水量が2倍、しかも気温が高く冷え込みが弱かった。ナナカマドは赤くならず茶色になり、ダケカンバの黄色もくすんでいるのが多かった。

9月末から焼岳や梅池、蝶ヶ岳などに行ったが、個人的にはどこも紅葉の感動はなかった。梅池は観光客で賑わっていたし、焼岳も蝶も好天の日を選んで行ったこともあるが、登山者はいっぱい、最近の特徴である若い登山者が多かった。みな絶景に目を奪われて口々に感動を表し、デジカメやスマホで撮りまくっていた。

長野市の善光寺の裏手に、長野県警山岳救助隊も訓練に使う物見の岩というクライミングゲレンデがある。そこで長野県連の仲間と久しぶりにマルチピッチの練習をして、翌週北八ッの稲子岳南壁を登攀した。稲子岳は天狗岳に近いが一般登山ルートは地図にはないので、あまり知られていない。東天狗岳からは絶壁のように見え、しらびそ小屋前のミドリ池から南壁は望めるが、なかなか気づかないかもしれない。ルートは「左カンテ」とはいうもののチムニー的なルートもあり、ほとんどカンテに行くわけではない。6ピッチのマルチで楽しむことができた。登りながら振り返って見える落葉松林は、これまた鮮やかな黄葉ではなかった。

白馬岳の大雪渓ルートが9月から通行止めになったことをふまえ、来年から梅池や鑓温泉経由とは異なる迂回ルートの検討に入ったようだ。昨冬の寡雪は異常で、今後もあり得るという村などの判断かもしれないが、登山者が白馬に登るのは大雪渓が目玉であるだけに、猿倉から白馬大池に至る迂回ルートができたとしても、登山者を呼び戻すことができるのだろうか。（今シーズン、かなりのキャンセルがあったという）

このことと直接関係はないが、白馬村の開発を巡って、夏から環境審議会が開かれている。目的は、開発業者にとって現在の基準は厳しすぎるため、規制を緩和して巨大ホテルなどを呼び込めるようにすべきというのだが、審議会でも現行基準でよいとする意見と分かれており、今後の動向が注目されている。

大町市で全国から約600人が参加して第17回ライチョウ会議が開かれ、私も一日参加した。ニホンジカ・キツネ・サル・カラス・テンなど、いままで麓にしかいなかった動物たちがライチョウの雛を捕食しているという。大町山岳博物館など地道に研究している人たちだけではなく、自然を愛し、山を愛するすべての人にとって、今後ますます



す大きな問題になってくる。 (10月20日記)